# 都伝壊しのマキナ

三多良梓甘露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
都伝壊しのマキナ

【Ｎコード】
Ｎ０７８０Ｘ

【作者名】
三多良梓甘露

【あらすじ】
都市伝説。身近にあって、誰もが身近に感じている恐怖や、不思議の一つ。
世界をまたにかける大企業の噂とか、幽霊の類とか。
でもどうせそれは、科学的に突き詰めれば何でもない真実であり、結局は皆に忘れ去られていくものだ。
そう思って、僕は都市伝説を科学的に壊してきた。

けど、彼女に会ってから、彼女に助けられてから。
僕は、科学でも証明できないことがあると知った。
ホラー的都市伝説物語、開幕。
信じる人がいるから、都市伝説は終わらないし
信じない人がいるから、都市伝説は忘れ去られていく。

## 第一幕　prologue4444（前書き）

あらすじ詐欺かもしれません……なんか申し訳ない。
どうぞ、最後までごゆっくりお楽しみください。
……途中までしか、まだ書き終わっていない甘露（かんろ）でした。
本当に、この物語を完結させることはできるのであろうか……

# 第一幕　prologue４４４４

明かりもなく、カーテンで締め切った薄暗いマンションの一室。外は夕暮れ時で、カーテンの合間から縫うように橙色の光が漏れてくるのが、唯一の光源といってもいい部屋で、数人の男女が一台のパソコンの前で話している。
一人は不安そうな声で、一人はどうでもいいような声で、一人は念仏を唱えていたりもする。
彼らがこぞって見ているのは、とある動画サイトである。日夜様々な動画がこのサイトに送られてくるのだが、その中に一つだけ奇妙な動画があるらしいのだ。
「動画？４４４４っと」
「や、やめようよぅ……の、呪いの動画なんでしょ？」
「そんなの迷信だろぉ？もっと面白い動画見ようぜぇー！」
「な、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
「ここまで来たら見るしかないだろぉ？……検索っと」
検索ボタンを押すのが面倒だったのか、一人の少年がパソコンのエンターキーを強く叩くと、その近くにいた少女が「ひぃっ」と小さな悲鳴をあげた。
その悲鳴を聞いて、エンターキーを押した少年はにやにやと笑う。
「お前さー。ビビり過ぎだよ。どうせネタだって。ネタ」
「そ、そうかもしれないけどぉ……怖いものは、怖いのよぉ……」
「ネタ？ならその動画面白いのか？」
「いやそういうネタじゃなくて……っていうか、お前も戻ってこいよ」
少年が今まで念仏を唱えていた少女の肩を掴んで、ぐらぐらと大まかに揺らし始める。
「南無法蓮華経、南無法蓮……ハッ！？動画を見終わったの？！」
「いや、まだだよ……全員で見ないと、意味ないだろ？」

「私を殺す気？！その呪いの動画っていうのは、見たら死ぬんでしょ？！」
ここ１カ月、日本各地で不思議な事件が起こっていた。
それは人々の間では【呪いの動画事件】と呼ばれている。
事件の概要としては、悲鳴が聞こえたという通報を聞いて警察が家に向かってみると、その家の住人や住人の友達が、首を切られて死んでいるといったものだ。
ここまでは普通の事件なのかもしれない。もしくは友達などを誘った無理心中や、集団自殺とも考えられるだろう。
だがそのような事件が多発するにつれ、警察は全ての現場に共通する、不可解な点を二つ発見した。
一つ目に、死体が皆パソコンの方を正面にして向いていて、後ろから首を切られたような殺され方をしていること。
二つ目に、現場には必ずといっていいほど「動画？４４４４」と血で書かれたメモが残されていること。
この現場を直接見たわけじゃないが、様々な人づてを使ってそれを知った若者たちは携帯のメールのネタやブログなどの記事、口コミなどを使って「呪いの動画事件」として広めていった。
そして、彼たちが見ている動画サイトには、動画に投稿された順に番号が付けられることになっている。
若者たちがいうに、このサイトの動画検索のときに、動画？６６６を調べればその呪いの動画が出るのではないかとささやかれている。
それを知った彼らは、今日ここに友人たちを呼んでその動画を見ようということになったのである。
ちなみに電気などをつけていないのは、雰囲気を作るため、だそうだ。
「明らかに呪いの動画っぽく作ってあるな……これ」
「やめようよぉ。絶対見ちゃ駄目だって！」
表示された動画は、文字を表示するためのプログラムがちゃんと整備されていないのか、詳細の部分や、動画タイトルさえも文字化け

してしまっていて、読めたものではなかった。
「……ただただ、不気味だなー。もうちょっと面白そうな動画かと思って損したぜ」
「当たり前だろ？そういう動画じゃないって、お前には何度言ったらわかるんだ」
少年はそう言って、すすすーっと滑らせるように動画の再生ボタンへカーソルキーを移動させてゆく。
「さて、再生するが……心の準備はいいか？」
その時、今まで念仏を唱えていた少女が自分を抱きしめるようにしてガタガタと震え始めた。
「どうした？美奈子（みなこ）」
「駄目……！再生しちゃ駄目！！」
美奈子と呼ばれたその少女は急にヒステリックな声をあげると、今までパソコンを操作していた少年からマウスを奪い取ろうとし始めた。
「急に何すんだよ！おい、やめろって！」
「駄目なの！私の第七感がいってる！再生するなって！」
「お前には第何感まであるんだ……」

カチッ

『あ』
二人が間抜けな声を出したのもつかの間、４人は顔を見合わせてから少年の持っているマウスを見た。
彼の右手の人差し指が、彼女とのいざこざのせいかしっかりと左クリックをしてしまっていた。
「やっちまったじゃねぇか！どうすんだよおい！」
「どうもこうもしないわよ！あんたのせいじゃないの！」
「ふ、ふ、ふ、二人とも落ち着いて！」
「ん、なんか始まったぞ？」
彼らが画面を見ると、漆黒の背景に赤い服を着た一人の少女がパラパラ漫画のようにアニメーションで歩いている動画が再生されて

いた。
「……なんだこれ」
「い、意外と可愛い……？」
「ああ、南無阿弥陀仏、南無法蓮華経！！」
美奈子と呼ばれた少女は床にうずくまるや否や、また何かお経を唱え始めた。
「調子狂うなぁ。ただのアニメーションじゃん」
「よ、よかったぁ……ただの動画で」
「ただ歩いてるだけかよぉ……つまんねぇなぁ」
彼らは一人一人、思い思いのリアクションを見せてその動画を眺めていた。
しかし動画の少女はただ暗闇の中を歩いているだけで、それ以外に特筆すべきことは起こらない。
「……飽きた。そろそろ止めていいか？」
「もうちょっとで何か起こるかもだけど……うん。いいよ」
「つまんないしなー。もっと面白いもん探そうぜ？」
そしてパソコンを操作していた少年が、動画をストップさせる。
――が、画面の中の少女はまだ歩いていた。
「あれ？もしかして、止めても動くってやつか？」
「それなら結構すごい動画なんじゃないか？これ」
「まぁいっか。さて、お前の言うとおり面白い動画でも――」
少年が動画の再生&ストップボタンから、ページの右上にある罰マークを押してページを閉じようとした時だった。

ヒヒヒ……逃ガサナイヨ……

「あれ？お前、何か言ったか？」
無感情の、どこか幼い少女の声。
少年は声が聞こえた隣へと顔を向けると、そこには先ほどから怖がってばかりいた少女がいた。

「へ？私？何も言ってないよ？」
少女は首をかしげながら言う。
「いや、逃がさないとかなんとか言ってなかったか？誰か」
「俺も言ってないぞ？」
そう言ったのは今まで面白い動画を探そうとうるさかった、少年の親友である。
「じゃあ美奈子……な訳ないか」
「南無阿弥陀仏、南無法蓮華経……」
美奈子はといえば、まだ床に這いつくばって画面を見ないようにしてお経を唱え続けている。

今、行クカラネ

「やっぱ誰か言ってるだろ。意地を張らずに、正直に手をあげなさい。俺は怒らないから」
「そう言われてもぉ……私じゃないし。」
「俺でもない」
「南無阿弥陀仏……」
少年は眉間にしわを寄せ、ふとまだ止まらないで歩みを進めている動画の少女へと視線を向けた。
すると動画にある変化が現れた。暗闇だった背景に突如、マンションのような物が現れたのだ。
「……なんじゃこりゃ」
「なんか、どこかのマンションみたい。やっとストーリーが始まったのかな？
「面白そうだな。見てみるか」
少年は親友たちに促されるまま、再びパソコンの前にあぐらをかいて座り、画面を凝視し始めた。
少し茶色っぽい外観で、どこにでもありそうな普通のマンション。少女はその中に入っていき、エレベーターのボタンを押した。

そこまで見て少年は、少しずつ背中に悪寒が走るのを感じた。なんだ？一体何が、この気持ち悪い感覚の元凶なんだ？と、少年の頭に疑問が現れた刹那、彼の頭の中に先ほど流れ込んできた幼い少女の声が反芻した。
今、行クカラネ？
……まさか！
少年の頭の中に、一つの答えが。考えたくもなかった答えが、導き出される。
それは最低の物語で、
最悪の現実、だった。
「ん？６階に降りたみたい」
「みんなぁ！！早く外に出ろ！！ここにいると殺される！！」
『へ？』
動画の少女はすでにエレベータから降りて、まっすぐ６０４号室のドアへと向かっているところだった。
そう、少年たちがいる６０４号室に。
「ど、どうしたの急に。大丈夫だよ。呪いの動画じゃな……」
「いいから早く！この部屋から出ないと―――」
ガチャリ、と。
鍵がかかっていたはずのこの部屋に、何かが侵入してきた。
「部屋の中に入って行って……リビングにいるのは……俺達？！」
少年と今まで動画を見ていた少年の親友の視線が、リビングの入口へと送られる。
そこには、紅い服を着て、
右手に、変色して黒ずんだ鎌を持ち、歪んだ笑みを浮かべているまだ幼い小学生くらいの女子が立っていた。
「う、うわあああああ！！」
真っ先に少年は目の前の幼女へと突進していった。
彼は思っていた。この程度の幼女なら、高校生である自分が体当たりでもかませば凶器を持っていたとしても、倒して逃げることは

できると。
　しかし、現実はといえば。
「うあああああああ――あ？」
　幼女は突然の突進にひるむこともなく、ただ少年の首をめがけて横一線に鎌をふるった。
　ただ、それだけだった。
「きゃあああああああ！！！！」
　返り血を払うために幼女が二回目の鎌をふるい終わった瞬間、目の前の現実にやっと脳の処理が追いついたのか、今まで動画を見ていた少女が耳をつんざくような悲鳴をあげた。
　幼女はそれを耳障りそうに聞いてから、次はまだ叫びをあげている少女へとその鋭き眼光を向けた。
　そして少女に歩み寄り、彼女の首をめがけて鎌を振り上げた。
「やめろおおおお！」
　しかしそこで、少年の親友の全体重を乗せたタックルが幼女に向かってきまった。
　そして取り押さえるような姿勢のまま、恐怖で今にも息が止まりそうになっている少女に大声で叫んだ。
「早く警察か何かを呼べ！！早く！！！」
　少女はこくりとうなずくと、玄関へ向かって走り出し――――
「逃ガサナイッテ、言ッタデショウ？」
　後ろから、幼女が投げ飛ばした鎌で首を切り飛ばされた。
「んなっ……？！」
　驚いたのは押さえつけていた少年の親友である。こんな無理な姿勢から投げた鎌が、あのように精密にまっすぐ飛んでいくものなのか。
　そしてその驚きは、
　恐怖へと変わった。
　少女の首を切り飛ばした鎌がそのままの軌道で、部屋を切り刻みながら幼女の左手の元へと戻ってきたのである。

幼女の左手は押さえつけている立場として、少年の親友の腹の真下のあたりにある。
つまり、そのままの起動だと鎌によって背中から腹に向けて貫かれてしまう。
そのありえない起動を描く鎌をさけようと、彼が押さえつけを緩めたその時だった。
「まず……うぐっ？！」
幼女の右手が爪を食い込ませるような勢いで、彼の首を掴んだのだ。
「あ……がっ……」
彼は彼で、体育会系であるからそれなりに力の強さには自信があった。
しかし、幼女の力はその彼をはるかに凌駕していた。
それはつまり、彼女は人外の存在であることを示していて、
同時に触れてはならないものだということも、示していた。
「や、やめ……」
「コレデ、最後ネ」
鎌は回転しながら彼女の左手、つまり空いている方の手へと渡り……
彼女は、彼の首の喉仏のあたりへと鎌の刃をあてて、少年の親友の首にあてていた右手を離すと同時、そのまま上に向かって左手を引いた。
「……アナタハ、見テイナイノネ。イイワ、今回ハ、許シテアゲル」
幼女は返り血を服や顔から流しながら、死体を左に転がすようにして立ち上がり、まだ念仏を唱え続けている美奈子を一瞥してマンションの一室から出ていった。
一枚の、不吉なメモを落としながら。
静まり返った部屋、一人残された美奈子は。
「う、うぐえええ……うあああああああああああ！！」
隣の部屋の住人が、異変に気付き警察を呼んでくるまで、

ただ、泣き叫ぶしかなかった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0780x/

---

都伝壊しのマキナ

2011年10月9日16時00分発行